

市内の百歳以上72人との報告に、「ホーツ」



吉川区の敬老会が18日、ゆつたりの郷ゲートボール場で行われました。今年の敬老会対象者（70歳以上）は1319人、このうち約480人が集まりました。参加率は、ほぼ昨年並みでした。

主催者を代表して中川副市長が挨拶し、市議会の古澤副議長が来賓の祝辞をのべました。昨年の敬老会で市長が高齢者のデータを並べたところ、「ホーツ」という雰囲気になりました。上越市内の100歳以上の人数は72人。吉川区内で今回、米寿を迎えた人は25人、白寿を迎えた人は1人。この数字が示されると会場は関心度100%になりましたね。みんな、健康で長生きしたい。それが一番の関心事なのです。

式典が終わって第2部はアトラクション。昨年と同じく、ゆつたりの郷が運営してのアトラクションとなりました。司会はこのほど内孫ができたばかりの橋爪吉夫さんです。舞台上に登場するメンバーのことをよく調べておいて、「さー、この次は、天国の父ちゃんに見せたい、その思いをいだいて鹿島京子さん率いる源山ゆり会のみなさんによる『出世太鼓』でございます」といった調子で進めます。時々「化粧も髪も直しました。普段よりきれいになりました。さあ、踊りの最後です。〇〇会のみなさんにも入ります。なかなか好評でした。アトラクションのメインは区内のグループによる踊り、市内で頑張る歌手による懐かしのメロデー、そして、ゆつたりの郷の従業員による歌のメドレーでした。飛び入りで田尻の上野一さんが新潟県民歌を熱唱されましたが、来年から敬老会参加者の登場が増えるかも知れませんね。

後期高齢者医療制度 四月実施は中止を

七五歳以上の人を「後期高齢者」と言うのだそうです。この人たちが他世代から切り離し、負担増と差別医療を押しつける後期高齢者医療制度の実施時期が近

づき、中身が知られるなかで、反対の声が広がっています。福田政権も改悪の「一時延期」を言いださざるを得なくなりましたが、その内容は、一部の負担増を先送りすることすぎません。

高い保険料を年金から有無を言わず「天引き」するとともに、払えない人からは保険証を取り上げる。高齢者に差別医療を押しつけ、まともな医療を受けさせない。このように、年齢で差別して別建てにする医療制度は世界に例がないそうです。小手先のごまかしではなく、制度の実施そのものを中止すべきです。



シラネセンキュウ。大岩にて撮影。

3冊目の本を出しました

私にとって3冊目の本が20日に全国で発売されました。今回の本は京都大学の岡田知弘教授などの共著です。本のタイトルは『山村集落再生の可能性』で、過疎化が進んでいる集落の現状と再生に向けた取り組みについて考える内容となっています。

私は、この本の中で吉川区の暮らしを書いたルポを担当しています。全体で約150ページのうち、私が書いた文は3分の1弱です。出版元は自治体研究社。価格は、税込みで1500円。ご希望の方は橋爪までご連絡をお願いします。

山村集落再生の可能性

—山古志・小国法末・上越市の取り組みに学ぶ—



岡田知弘・
にいがた自治体研究社
●編

自治体研究社

Hさんが杉の枝打ちをしていて、七メートルもの高いところから落下したのは二月の末のことです。もう一本、枝下ろしをすれば終わりというところでの事故、右足の複雑骨折、左足はかかとが真っ二つに割れるという大怪我になりました。入院は当初予想を大きく上回り、七ヶ月にも及びました。

春先に入院し、秋までの闘病生活。三回にわたって手術が行われ、その後はリハビリが続きました。本人が考えていた以上にたいへんだったようです。でも、担当のお医者さん、看護師さんなどたくさんの人たちがHさんを支えてくれました。

入院して一番最初にHさんに声をかけたのは看護師のSさんでした。「Hさん、シッコ足りなくて困ったねえ。もつと、水、どんどん飲んでね。飲まないで脳梗塞になるわよ」。入院した病院に五台しかない高性能のベッドを使わせてもらったとはいえず、両足が不自由の身、Hさんは看護師さんに迷惑をかけてはならないと水分補給を控えていたのです。Sさんのひと声で、遠慮しないで水分をとることにしました。

ベッドから動けない日は連続して三〇日にもなりました。その間、もちろんトイレに行くことが出来ません。便器を用意してもらって用を足すことになりました。看護師さんたちのやかいになりました。几帳面なHさんは、一回用を足すごとに枕元のカレンダーに鉛筆で印をつけました。一本ずつ棒を引き五回になると「正」という字になるやり方です。三〇日で合計二三七回。これは看護師さんたちにお世話になった回数であり、印です。

Nさんはゴミの片付け、車椅子の空気入れ、ベッドのシーツ交換など、なんでも屋さん。ちよつと男ずっぽのところがありますが、気は優しく、病室をいつも明るくしてくれる女性です。赤ら顔のHさんを見るなり「Hさん、いっぱい飲んでいんじゃないの？」などと冗談を言って、みんなを笑わせます。そのNさんは、Hさんのためにでっかい足枕をつくってくれました。

Hさんが入院してから一番たいそ（難儀）だったのはリハビリでした。平行棒にかかりながら、片足で案山子（かかし）みたいに立つ、その動作だけでも一ヶ月かけて訓練をしました。

リハビリを始めたばかりの人は無表情の人が多のですが、リハビリの行程が増えていくと次第に笑顔に変わっていきます。片足立ち、マットの上にあがって重りを付けた足を上下する訓練、階段を上る訓練ど、一つひとつ増えるごとにHさんもうれしくなると言います。自転車こぎの訓練をさせてもらえるようになった時には、「よく、ここまでたどり着いたね」とほめられました。

お世話になったお医者さんや看護師さんなどは、Hさんには神様に見えました。退院が見えてきた頃、Hさんは思い立ってひとつのことをはじめました。二ヶ月つければなしたかったギブスに、こうした人たちがからサインをしてもらい、お守りにしよう。時間を見つけては一人ひとりをお願いしました。「七ヶ月間、お疲れ様でした」「お元気になっておめでとうございます」「無理をせず頑張ってください」「お元気で」。縦一〇センチ、横一〇センチのギブスは、たくさんのメッセージでうまりました。

「家に来たら、段坂があつてたいへんだ」と現在も自宅でリハビリを続けるHさん、お守りは手づくりの袋に入れて、居間の見えるところに置き、頑張っています。この調子でいけば、来春、大好きな田んぼ仕事に復帰できるにちがいません。

ベテラン勢も奮闘、スキークが勝利 第3回吉川区駅伝大会

今年も吉川区駅伝大会は好天に恵まれました。参加したのは旭ランナース、スキークラブなど8チーム。JAえちご上越の旧源支店前を午前10時にスタート、旧旭小学校のグラウンドにあるゴールをめざして9人がタスキをつないでタイムを競い合いました。

優勝したのはスキークラブです。記録は1時間12分43秒。若い選手だけでなく、常山光雄、中嶋宏隆などのベテランの選手が区間トップになり、勝利に貢献しました。2位は骨太（チーム名）で1時間13分25秒、3位は旭ランナースで、1時間13分47秒でした。

今回の駅

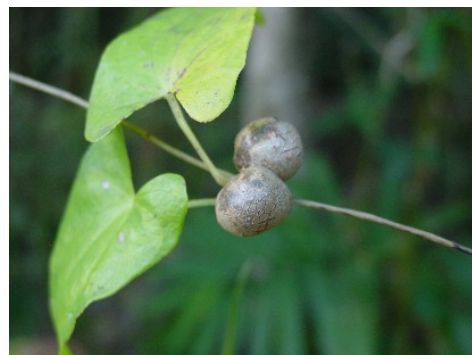
伝に参加した選手の中で最高齢は団塊世代の長谷川徳夫さん、最終区間で3位という大健闘でした。

郷土料理とバイキングを楽しむ会 来月14日開催、吉川区の料理を紹介

8回目の郷土料理とバイキングを楽しむ会が11月14日午後6時半から、高田のデュオ・セレッソで行われます。

今回の郷土料理のメインは吉川区と三和区です。吉川区については伝統的な「母さんの味」から始まって全国に自慢できる食べ物がいくつもあります。大いに楽しんでもらい、吉川の味が心に残るようにしたいものです。

今回は約600人が集まり、大盛況でした。郷土料理の紹介は地元市議会議員がすることが慣例になっていて、今回は私が担当します。申し込み方法など詳しいことは追ってお知らせします。



【むかご】「いもご」と言う人もいます。山芋の葉の付け根にできる球芽で、かむと、とろりとしみます。煮て食べてもよし、炒って食べてもよし。でも一番は、むかご入りご飯かな。美味しいですよ。



写真は2区でトップを走るランナー。橋爪が撮影。